

心動かす、大切な一言

「もっと表情豊かに。教師自身の心が動かないと、子供は育たないよ。」

これは、事後研修会での大先輩からの助言である。校内での授業研究に向けて、事前に何度も指導案を検討していた。「この単元でどんな子供を育てたいのか。」「子供は何を目指してこの学習をスタートするのか。」「本時のねらいは?」「子供一人一人の実態は?」など、部会で先輩の先生方からたくさんの指導助言を受けて、自分なりに自信をもって取り組んだ授業であった。他の先生からはある程度の評価をいただき、やや満足していた時だけに、その厳しい一言にとってもショックを受けてしまった。

「子供の発言をしっかり聞いて切り返しの発問を行ったし、板書にも位置付けたのに。表情がないなんて。心を動かすってどういうことなんだろう。」と、大先輩の助言を素直に受け入れることがなかなかできず、むしろ、くやしさがどんどん膨らんでいったのを、よく覚えている。

しかし、このくやしさのおかげで、それ以降、授業の見方が変わったように思う。教材文や資料文を読むとき、子供に課題を投げかけるとき、子供の発言を聞いているときなど、先輩や同僚の先生方はどんな工夫をしているのだろうと、真剣に見て学ぶようになった。そして、分かったことは、自分は「正しく」という思いばかりが先行し、子供の様子を見ながら思いが伝わるように話すとか、言葉だけでなく表情やしぐさから子供の思いを理解しながら聞くといったことが、欠けているということだった。

今、振り返ってみて、私に最も足りなかったことに気付かせてくださった大先輩の一言に、とても感謝している。厳しいけれど、大切なことを気付かせてくれる一言。私はそんな一言を、後輩たちに、勇気と責任をもって語れる、そんな先輩になりたいと強く思っている。